2020 年 5 月 24 日　ラウンドテーブルの実施報告

社会教育学会六月集会（宇都宮大学）が新型コロナウィルス感染拡大防止のために、開催が中止となりました。そのため、上記集会にて実施を予定しておりましたラウンドテーブルについて、オンラインミーティングツール（Zoom）を使用して実施しました。

●日時：2020 年 5 月 24 日（13：30～16：00）
●テーマ：子ども・若者支援において「社会教育的支援」をどう位置づけるか（2）
●コーディネーター：生田周二（奈良教育大学）
●報告者：大村惠（愛知教育大学）「人格形成に視点を当て、教育的・集団的アプローチを探る」
津富宏（静岡県立大学）「若者の自立を問い直しつつ連携のあり方を探る」
櫻井裕子（奈良教育大学）「心理的側面を踏まえ子どもとの関係性を探る」
●内容

今回のラウンドテーブルでは、科研による研究プロジェクトで 2020 年 3 月末に作成した『子ども・若者支援専門職養成ガイドブック―共通基礎―』（sample 版）（子ども・若者支援専門職養成研究所編）についての報告を踏まえて、議論が行われました。このガイドブックは、子ども・若者支援に関わる人たちの「共通基礎レベル」の知識と方法論、大切にすべき価値に関する養成・研修のための試行版です。

●櫻井裕子の報告「心理的側面を踏まえ子どもとの関係性を探る」

『子ども・若者支援専門職養成ガイドブック―共通基礎―』（sample 版）における、「Ⅰ-3 子ども・若者支援をめぐる現代的課題の理解」と「Ⅱ-1 子ども・若者と出会い、向き合う（居場所と対話・自尊感情に関する理解を踏まえた対応）」についての報告であった。

本報告では、不登校・ひきこもり支援を行っていく上で必要となるであろうと考えられる基礎知識とともに、不登校・ひきこもりの背景要因として、発達障害や虐待・DV、貧困などの問題も伝達する必要があると報告された。また、子ども・若者の居場所を形成していく上で、必要となる支援者の態度や関わり方についても話された。

参加者からは、「居場所」の構成要因として、物理的空間と時間だけでなく、他者との関りやその質が重要であるということは、実践現場に携わる参加者からはとても共感できる内容として受け止めることができたとの意見が多く聞かれた。また、多様な背景を抱える児童生徒が増加している中で、義務教育段階における社会教育的な支援について考えていく視点を持つことが重要である、との意見も散見された。

＜今後の研究への指摘＞

・ 今後の研究として、オンラインおける学習や学活、様々な活動の参加といった行為を、どう評価し、どのように「多様な居場所」として捉えていけるのかという点が明らかになると、ガイドブックとして読み手の実践的なニーズに応えられるのではないか
・ 実践現場では、ゲームやオンラインの対応について悩むことが多いため、「ネットゲーム依存」をどうとらえるかについて加筆をしてほしい。
・ 居場所においては、「子ども扱いしない」という対等性の担保という点や、“ただ居る”という「居場所における身体性」という事についても今後大切になってくるのではないか。
・ 「学校は民間支援団体の介入に慎重」という話があったが、高校生段階では民間支援団体が学校に入り込む実践が見られる様になってきているため、公立小中学校と高校段階等、各段階における現状について細かく見る必要があるのではないか。

●津冨宏の報告「若者の自立を問い直しつつ連携のあり方を探る」

『子ども・若者支援専門職養成ガイドブック―共通基礎―』（sample 版）における、「Ⅰ-5 子ども・若者支援の福祉的側面の理解」「Ⅱ-B-2 困難を抱える若者に対する自立までの継続的な支援」「Ⅲ-1 関係者、支援者や学校などとの機関との連携やネットワークの構築と活用」についての報告であった。

新自由主義による緊縮財政下において、縮小する家族福祉や障がい者福祉、児童福祉、若者の就労支援などの現状と問題点（申請主義や縦割り行政など）や、脱工業化社会における自立のための多様な依存先確保の困難さ、支援団体においてより良い連帯を形成することの重要性について報告された。

本報告について、協力者を増やすために緩いメンバーシップを持つことが大切だということや、自立支援に関して「自立とは、自重を支える多くの支点を獲得することである」という定義について、とても共感できるとの意見が多くの参加者間で聞かれた。また、支援者間や支援者-被支援者間におけるコミュニケーションをどのように定義し、どの様にスキルとして獲得してくのかについても議論が行われた。

＜今後の研究への指摘＞

・ 支援する側として今度、どの様に体制を維持していくかが大きな課題
・ 「自立」＝「多くの支点の獲得」「依存先を手に入れる事」という定義についてもっと知りたい。「自立」というよりは、「自立するための手段の一つ」と個人的には考えているがどうかのか。また、ガイドブックの中に「自立」についての別の定義があるようだが、それとどの様な関連があるのか
・ 子ども・若者の育ちを支える際に、他機関との連携の必要性をなぜ、どのように感じているのか、どの点に注意が必要と感じているのか、どう「連携・ネットワーク・連帯」を生かす可能性を、あるいは限界を感じているのか、を整理して示すとなおよいのでは

●大村惠「人格形成に視点を当て、教育的・集団的アプローチを探る」

『子ども・若者支援専門職養成ガイドブック―共通基礎―』（sample 版）における、「Ⅱ-2 集団・コミュニティ形成への支援―主体性を尊重する支援方法―」「Ⅱ-3 リフレクションの展開、ケース記録などの作成・整理」「Ⅲ-4 事例研究「NPO 法人いまから」の実践に学ぶ」についての報告であった。

本報告では、主体性を尊重する支援とは「集団への参加」「関係性の形成」「発達の保障」という過程・プロセスへの支援であると提案し、子ども若者支援におけるプロセスの中における集団形成から地域づくりまでつながる支援の事例が紹介された。

また、多様な支援者像（ピア、ボランティア、専門職、アマチュアなど）をどのようにとらえ、特にアマチュアレベルの支援者をどのように支えていくかについて検討、議論された。

加えて、支援における見立てそのものが感受性（センス）の中核にあるのではないかと提案し、“感”や“センス”とはどの様なものなのか、どの様に獲得、養成されていくのかについても議論、検討が行われた。

＜今後の研究への指摘＞

- センスについて、どのような視点を持つことが感度を高めるのか等が文章化されていると、支援者の学びの指針にもなるため大変ありがたいと感じる。
- ガイドブックの中では、「センス（感受性）」は専門的能力として扱われているが、それには個人差があると考えられる。そこで、支援者個々の事情を踏まえたうえで、外部からの介入（＝支援者への育成）のあり方を考える必要があるかもしれない。
- センス・感受性について、確かに支援がうまくいくか、被支援者と良好な関係が気づけるかについてはそういった要素があるのかなと思いました。一方でもっと詳しくセンスという言葉の示す中身、実例などを知りたいなと思いました。
- 「子どもにやさしいまち」をブックでも取り上げ、子ども若者支援における一つの基準とするならば、理念説明・価値共有も必要だと思いました。1 章の子どもの権利の欄にて解説を加える方法もあろうかと思います。

【付録】

＜ガイドブックの構成＞

『子ども・若者支援専門職養成ガイドブック―共通基礎―』（sample 版）（子ども・若者支援専門職養成研究所編）（全 87 頁）

はじめに……ガイドブックの編集目的と「子ども・若者支援の従事者の専門性」概説

Ⅰ　子ども・若者支援の課題把握

1　子ども・若者をめぐる歴史・子どもの権利・法・文化・取り組みなどの概要の理解

2　子ども・若者支援の基礎概念(自尊感情、対話、居場所、自立)の理解と教育的・福祉的対応の理解

3　子ども・若者支援をめぐる現代的課題の理解

4　海外の動向を踏まえた、“第三の領域”としての子ども・若者支援の理解

5　子ども・若者支援の福祉的側面の理解

B-1　子ども・若者支援における医療的支援―発達障害、精神疾患とその支援―

Ⅱ　支援の方法論の把握・活用

1　子ども・若者と出会い、向き合う（居場所と対話・自尊感情に関する理解を踏まえた対応）

2　集団・コミュニティ形成への支援―主体性を尊重する支援方法―

3　リフレクションの展開、ケース記録などの作成・整理

B-1　心理アセスメント、カウンセリング、心理療法（サイコセラピー）の技法

B-2　困難を抱える若者に対する自立までの継続的な支援

B-3　家族支援、ペアレントトレーニング、オープンダイアログ

Ⅲ　社会性・寛容性、連携力

1　関係者、支援者や学校などの機関との連携やネットワークの構築と活用

2　児童虐待等の早期発見、ならびに児童相談所等の関係機関と連携した対応

3　事例検討会の実際

4　事例研究「NPO 法人いまから」の実践に学ぶ

※デジタル版冊子は研究所 HP より DL 可能です。